





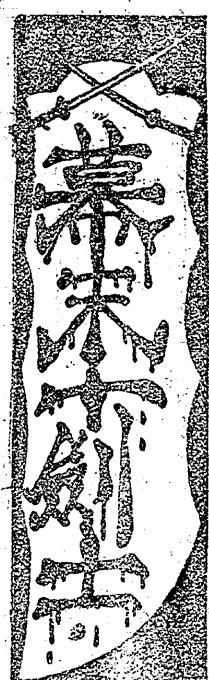


富五郎が銚子に用事があつて行つた戻りに新生の留吉の所へきて想ひ合つた二人の仲、無粹な事をして二人を割くとあの様子では情死をするであらう、潮來出島で浮名を流すは留次郎さんと雙鶴さんは本望だらうがお前さんは迷惑、茲は夫婦にしてやるが功德と云はれて此方も苦勞人、それではとは是から雛鶴を受出して親にいひつけられた、およしと云ふ名を呼ばせ留次郎と一緒にした、二人は大喜び恁ふなつたも勢力さんの粹な扱ひゆえ折があつたらばこの恩返しをしたいと旦暮飯岡の助五郎が身内

勢力富五郎は留次郎の云ふ事を聞いて居りましたが、富「オイ／＼留さんお前は大分のぼせてるるな、恁となつては醫者の療治では愈るめえ・まあ／＼阿父さうに苦勞させぬやうにあつきりと遊ぶがよい」

と意見をした、然し二人は夢中になつてゐる事とて、いよいよ足を繁く留次郎は通ふ、この事を聞いて勢力

悟道軒圓玉演



末をさせるとなると甚だ躊躇をする。朝寝をする、その上にお定を虚待する、懶巧な娘とて此家に居ては殺されるであらうと叔父の藤次の許へ逃げて行つた。此藤次は磯右衛門の弟でやはり此村に居る、營業は農作・兄弟思ひの堅い人物磯右衛門がおしんの色香に迷つてゐる事とてお定がおしんの虚待に堪えかねて藤次の許へ逃げて行つても心にも留めず相變らず鼻の下の距離を延ばしてゐた、とこの館山領は柿の產地磯右衛門も柿を培養してこれを江戸へ送る、丁度九月の事でしたが隣村まで用達しがあつての戻り、夜の十二時頃に住ま居の裏手に來るとバタリと云ふ音がした何だらうとその音のする方をみると柿の木に登り實を取つては落してゐる者がある。闇夜の事とて年頃や風采は冥利な惡事をする奴だ、判らぬが取つてゐる事は能く見へる。